

# 琉球大学学術リポジトリ

## 琉大千原キャンパスの歴史と人々の暮らし

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2020-10-14 キーワード (Ja): 琉球大学の歴史, 杣山, 琉球王国の茶園 キーワード (En): History of the University of the Ryukyus, Somayama, Tea garden in the Ryukyu Kingdom 作成者: 仲間, 勇栄, Nakama, Yuei メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/46989">http://hdl.handle.net/20.500.12000/46989</a>

## 琉大千原キャンパスの歴史と人々の暮らし

仲間勇栄

琉球大学名誉教授

### The History of the University of the Ryukyus Campus and People's Living

Yuei NAKAMA

*Emeritus Professor, University of the Ryukyus*

キーワード：琉球大学の歴史， 杣山， 琉球王国の茶園。

Key word: History of the University of the Ryukyus, Somayama, Tea garden in the Ryukyu Kingdom.

Corresponding author (Email: fukuginakama@nirai.ne.jp)

Abstract : The campus of the University of the Ryukyus is approximately 1.26 million square meters at present. It spans three administrative districts: Nishihara Town, Nakagusuku Village, and Ginowan City. Before relocation, the area was a forest mainly owned by Nishihara Town and Nakagusuku Village. The Nishihara forest was called “Tanabaruyama” during the Ryukyu Kingdom period, and it was a “Somayama” where tea gardens and trees planted exclusively for the Kingdom were cared by the Imperial Palace of Shuri. “Somayama” means the mountain that provided the kingdom with wood. Since the Senbaru campus stratum contained old formations such as old Yanbaru-type Nago and Kayo strata, plants like Itajii (*Castanopsis sieboldii*), Okinawa Urajirogashi (*Quercus myyagii*), etc. found in acidic soils of Yambaru were used to be growing. However, due to topographical changes, the Itajii trees have now disappeared and only a few Okinawa Urajirogashi can be seen around Senbaru Pond. In this Senbaru district, the mountain managers began to live during the period of the Ryukyu Kingdom, and many migrants from Shuri have settled in since Meiji era. These settlers used to live along the river in Senbaru, making use of the blessings bestowed by the rivers and mountains until around the late 1960s before the University of the Ryukyus moved. They lived mainly by growing sugarcane. Even now, the Ryukyu Kingdom's tea garden, wells, sacred places, tombs, ruins, and the many traces of life the people who settled there in later years are still left behind in this Senbaru campus. Now, few people know the historical sites still there. I believe that restoring the history and culture of our roots and conveying these to students will be a place for rediscovering living science and also a fundamental part of university education.

### 1. はじめに

今の琉大千原キャンパスが、以前どのような場所だったのか、また移転後、この敷地内に過去の遺跡などが数多く残されていることを知る人は少ないと思う。

千原キャンパスが出来る前のこの地は、西原町・中城村の公有林が多くを占めていた。この公有林は琉球王国時代の杣山に系譜をもつ歴史ある山である。杣山とは王府の御用木を生産する山のことである。1879年(明治12)の廃藩置県以降、この地には首里からの寄留民が数多く住みつき始める。現在、千原キャンパス内には、これら寄留民の生活痕跡や王国時代の歴史遺跡が数多く存在する。

これらの歴史遺跡や人々の生活痕跡が、どのような形で残されているのか。このことを体系づけて取りまとめた研究事

例は、ほとんど見られない。そこで本稿では、これまでの聞き取り調査や既存の文献史料などを援用して、千原キャンパスの歴史と人々の暮らしの実態を明らかにしておきたいと思う。今後、大学の環境教育の面で、足下の歴史や文化を知るための情報提供の一助にもなれば、と考えたからである。

### 2. 現在のキャンパスの概要

1979年(昭54)3月、農学部が最初に首里キャンパスから移転を開始し、1984年3月には全ての学部が移転完了する。振り返ると、農学部が移転して早くも40年以上の年月が経ったことになる。

現在の琉球大学キャンパスの面積(千原と上原キャンパス)は約126万㎡で、うち千原キャンパスは112万㎡である。これ

は日本の国公立大学の中で単一のキャンパス面積としては、九州大学伊都キャンパス（約 271 万㎡）、筑波大学筑波キャンパス（約 260 万㎡）、広島大学東広島キャンパス（約 250 万㎡）、北海道大学札幌キャンパス（約 177 万㎡）に次いで、第 5 番目の広さである。

現在のキャンパス敷地は、西原町・中城村・宜野湾市の 3 行政区にまたがっている。移転前は主に西原町の町有林と中城村の村有林であった。明治期の西原村の杣山は 52 町、中城村の杣山は 47 町である。この杣山が戦後の西原町と中城村の公有林の元になっている。これらの合計面積 99 町が、ほぼそのまま現在の琉大キャンパスの敷地に移管したことを考えれば、現在のキャンパス敷地の約 79%は西原町と中城村の公有林に由来する面積で占められていることになる。

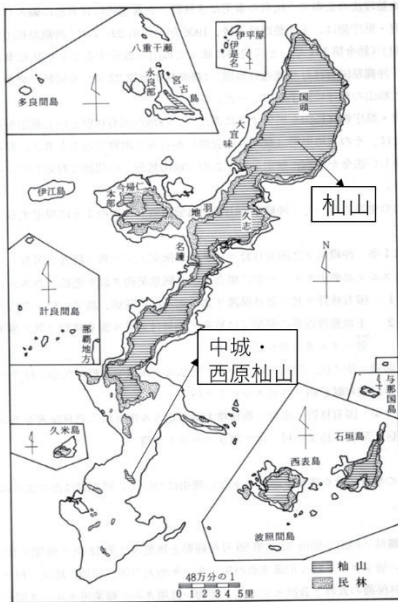


図 1. 沖縄本島の杣山の分布  
出典：仲間, 1984.

### 3. 以前の千原の植生

千原の地層は、新生代第三紀（鮮新世, 500 万年前）の島尻層に名護層（中生代）・嘉陽層（新生代第三紀）の一部、石灰岩（第四紀）などが混成しているという（神谷, 1984, 仲間, 1989）。名護層や嘉陽層は山原型の古い地層である。聞き取りによると、かつてこの場所にはイタジイやオキナワウラジロガシなど、山原に見られる植物が生えていた。ブナ科のイタジイやオキナワウラジロガシ、茶の木（ツバキ科）、ポチョウジ、テンニンカ、コシダなどは、酸性土壌に出現する植物（仲間, 1989）で、この千原の自然環境が山原の土壌環境に類似した要素を含んでいたことの証左である。したがって、この千原の地が王府直轄の杣山に指定され、後述するように、茶樹の栽培が行われたのには、土壌環境に起因するところが大きいと言える。今ではイタジイの木は消滅してしまったが、オキナワウラジロガシは千原池の周辺に 2 本確認できる。

ところで、近世期に作成されたとみられる「薩摩藩調整図」には、沖縄本島の杣山は、国頭から読谷あたりまで連続して分布しているが、それ以南には途切れて、急に飛び地のように西原・中城辺りだけに出現する（図 1 参照）。それはなぜなのか。その理由について、仲間栄二氏は植物社会学の面から、以下のような説明をしている。仲間氏は神谷厚昭氏の「ウルマ変動」（第四期更新世, 170 万年前）による中城湾の陥没説（神谷, 1984, 図 2 参照）を援用して、次のようなストーリーを展開する。まず陥没前の中城・西原の杣山の場所には、国頭地方と類似の植生（イタジイ林・オキナワウラジロガシ林など）が成立していた。それが陥没時に山塊の一部が崩壊して、大量の土塊が内陸に移動し、その土中にブナ科の種子が混入していた。これら山原型の土塊と、その中に混入していたブナ科の植物が、後年、中城・西原杣山のフロラの成立要因になったという。

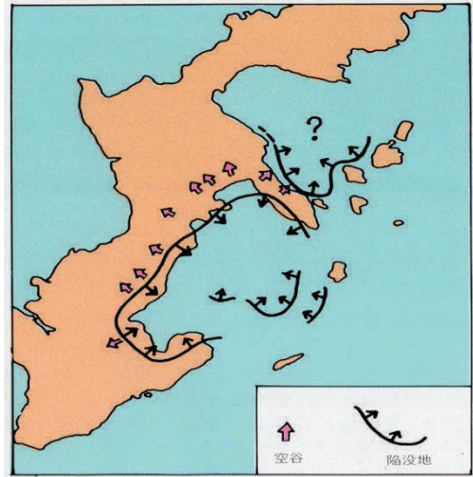


図 2. 沖縄本島中城湾の陥没模式図  
出典：神谷, 1984.

### 4. 千原キャンパスの歴史

西原町の町有林は琉球王国時代には「棚原山林」・「棚原山地」と呼ばれ、首里王府の御用木・茶園を経営する「杣山」（ソマヤマ）であった。近世期の「琉球国惣絵図」には、中城間切の杣山は「カナイタ山」、西原間切の杣山は「棚原山」と記載されている（図 3 参照）。杣山とは王府の御用木を生産する山のことであり、その管理・利用は一般に周辺の村落共同体が担っていたが、中城・西原両間切の場合は数名の「山番人」によって、王府直轄の管理が行われていた。中城・西原両間切の杣山では、「山番人」（ヤマバーン）は管理だけでなく、造林も行う義務が課せられていた。その対価として、「山番人口畑」（屋敷・畑地）が無償で与えられていた。

王府の公文書を集めた『球陽』（尚敬王 21 年）には、1733 年に約 7ha の面積が「棚原山地」に開かれ、茶樹と同時に広葉杉（コウヨウザン）、イヌマキなどの御用木も植えられたことが記録されている。

琉球には以前から茶樹はあったが、ただ「粗茶」を出すだけ

で製茶の方法はよく知られていなかったようである。1731年、首里の役人が進貢使に同伴して、中国の福州で茶葉の製造方法を学び、帰国後、試みに清明、武夷、松羅などの茶葉を製造してみると、香りや味も甘美で中国茶とあまり変わらなかったという。この年（1733）になって、茶樹を棚原の地に栽植し国用に供することにした、と『球陽』の記事は伝えている。清明、武夷などの茶は主に半発酵させたもので、ウーロン茶の一種である。松羅は中国緑茶である。

仲吉朝助著『杣山制度論』（明治37）によれば、王国時代の中城間切の杣山の面積は47町、西原間切の杣山は52町となっている。明治以降、これらの杣山は「沖縄県土地整理法」（明治32、官民有区分）と「沖縄県杣山特別処分規則」（明治39）などの法令を通して、地元の町村に払い下げられ、この時期に中城村有林、西原村有林も創設されている（表1参照）。

明治以降、中城・西原両村の公有林の管理は、王国時代の「山番人」による管理方法をそのまま踏襲していたが、昭和初期、この「ヤマバーン」制度は廃止され、当時の居住人（主に首里からの寄留民）との分割借地形態に変わっていった。



図3. 中城・西原間切の杣山（点線で囲まれた所）  
出典：『琉球国惣絵図』（『北中城村史』第7巻文献資料編）より転載。

### 5. 棚原山の生活誌

『琉球国惣絵図』（近世期）に記載された本地域（図3）と周辺住民からの聞き取り調査を重ね合わせると、千原の川の周辺には51の屋敷跡が確認できる。これらの屋敷は、王府時代のヤマバーンの末裔や、主に明治以降、首里辺りからの移住者（ヤードウイ）によって形成されたものである。

琉大の千原池は新たに堰き止めて造られたもので、以前は、きれいな川が流れていて、そこで魚、ウナギ、カニ、カワエビなどを採ってきて料理して食べたという。またこの川の水は飲料などの生活用水としても使われていた。

周辺の住民は、ヤマバーンの目を盗んで、村有林内で山羊や牛馬の草を刈ったり、また薪などを採ったりした。ヤマバーンの人々は、マーチパーの葉（松の葉）、グシチ（ススキ）、木の下枝などを無償で村有林内から採取し、ギンネム、サトウキビ

の搾り殻などと一緒に、サーターヤーの燃料に使っていた。

木の実などは、山入りして自由に採って食べた。シイジャー（イタジイ）の実を煮てから割って食べた。ヤマムム（ヤマモモ）の実を漬物にし、また生でも食べた。漬物はタケノコと一緒に塩漬けにした。タケノコは鮮やかな紅色となった。ヤマモモにはミジウムとイシウムがあって、ミジウムの方がおいしく味も良かった。カシ（オキナワウラジロガシ）の実は、クールマー（コマ）にして、よく遊んだ。シメジなどのキノコ類が、シイヤマツの木の下などにあつて、昔、オバーたちが採ってきて、料理してよく食べさせられた。

その他、ハンキ（ノボタン）、ギーマ、テーニー（テンニンカ）、クワギ（シマグワ）、アカギ、バンシルー（バンジロウ）、クービ（ツルグミ）、シークワサー（ヒラミレモン）などの実も、よく採って食べた。

クービの木の実の皮は煎じて飲んだ。利尿効果があったという。

クサンダキ（ホテイチク）は釣り竿や家の屋根の材料に、ンジャダキ（ホウライチク）は、ミージョーキ、バーキ、カゴなどの竹細工用に、マータク（ダイサンチク）はタンクなどから水を引くときの水筒用に、それぞれ利用した。

### 6. 千原キャンパス周辺の遺跡（拝所・地名・屋敷跡など）

#### 【あ行】

#### 按司墓（図4）



図4. イングスクの按司墓

イングスクの農学部農場側の斜面にある。墓標のみが残されていて、それには「大城門中按司墓」と刻銘されている。以前、墓には厨子甕が置かれていたという。清明祭のときに、西原町内の津覇や伊集の集落から拝みにきている。墓の由来などについての詳細は不明である。

#### イングスク（イシグシク、イスクグスク、図5・6）

農学部本館から西側約300m、農場の圃場を西側から囲む丘陵地にある。東西65m、南北160m、標高約137mの石灰岩の台地上にある。出土する輸入陶磁器から、14～15世紀に造営されたとみられる。このグスクから南側の棚原集落の方向に棚原グスクがある。イングスクは棚原グスクを守るための支城と

して造られた、といわれている。

この丘陵地には現在でも、棚原、千原、森川、嘉手苺の中山家、中城村津覇の人々の墓が数多く残され、毎年、拝みに来る人たちもいる。

このグスクを含めた小高い森は、イシグスクモーとも呼ばれている。第二次大戦中はここに日本軍の210高地があった。そのためこの辺りは激戦地となり、米軍の攻撃を受けて焼け野が原になって、戦後、遺骨がゴロゴロしていたという。

このイシグスクは2002年7月下旬ごろ、資材置き場の造成工事のために、その3分の2以上が破壊され、史跡の保存をめぐって問題になった所である。



図5. イシグスク（円内、手前の建物は農場棟）



図6. 破壊されたイシグスク（2002年）

#### 井戸（農場、図21）

農場の南北にのびる丘陵地の下にある。イシグスクから北北東およそ120mの所、農場試験室の横にある。直径1m程の掘り抜きの円形井戸である。周囲はコンクリートで固めてある。深さは数メートルもある。井戸の上は長方形のコンクリート製の蓋がかぶせてあった。井戸の中には、まだ水が溜まっている。

#### 井戸・屋敷跡（法文学部、図7）

法文学部の正面玄関から東側の小高い森の中にある。周辺は石とコンクリートできれいに整備されている。井戸内へはパイプで通気孔が設けられている。中にはまだ水が溜まって



図7. 法文学部東側の井戸と屋敷跡

いるようである。

周辺住民からの聞き取りによると、この井戸のあるところは、石原さんという方の住居跡であったという。

#### ウフドゥディーモー（ウフドゥデーモー）

ウフは大きいこと、ドゥディーは頭がハゲていること、モーは原っぱのことである。農学部棟の辺りである。昔、若者達が毛遊びをした所といわれている。

#### ウフタチグムイ（図21）

球陽橋の東側の川が湾曲した溜池状のところである。ナービグムイの約20m下流域にあった。この場所で馬を浴びせたり、子供達が泳いだりした。よく溺死があつて、大人から子供だけで泳がないように注意された。一番深いところで約2m、広さ100坪ぐらゐはあつた、と言われている。

#### ウマウィーグラー（チャーヤマンマーイ、千原馬場、図8）

宜野湾口から入った最初のキャンパス内信号機の右側、農場の方向の通りのところである。長さ約108m、幅9mの馬場であったという。ここで馬競争が行われ、また子供達のカケッコの場所にもなっていた。



図8. 千原馬場跡（信号機から農場方向）

#### 【か行】

##### 果樹園

『西原町史』（第四巻資料編三）の民俗編によると、千原では1960年（昭和35）ごろ、台湾出身の陳という人が、千原馬

場の南側,現在の農学部南棟側から農場棟辺りの山地で,約2万坪の村有地を借地開墾し,果樹園を開いていたという.この果樹園では,主に紀州ミカン,ポンカン,パンジロウなどを栽培していたというが,琉大移転に伴い,この果樹園は撤去され,今では跡形もない.

**クガニガマ (図 21)**

体育館隣のテニスコートの北側,小道の交差点辺りにある.クガニは黄金,ガマは洞窟の意味である.黄金の光がこの洞窟内で輝いたという伝説がある.地名はこのことに由来するらしい.

**ガチマタ (図 21)**

大学会館から南側の辺りの地名である.以前は川が合流して滝が流れていたという.

**【さ行】**

**サーターヤヤー (図 21)**

サーターヤヤーは小規模の黒糖製造所のことである.明治以降,サトウキビ栽培が解禁(明治21)されると,徐々に千原の地でもサトウキビが栽培されるようになった.このサトウキビを原料にした黒糖づくりが盛んになっていくが,その製造場所がサーターヤヤーであった.聞き取りによると,千原には,前千原に2カ所,後千原に3カ所,合計5カ所のサーターヤヤーがあったという.上原集落では8カ所のサーターヤヤーがあって,1つのサーターヤヤーは8~10戸で構成されていた.

**サカタリ山 (サキタリ山, 図 21)**

場所は琉大の現在のサッカー場辺りである.昔,密造酒を造っていたことから,この名が付いたという.

**シージマタヌ嶽 (シージマタヌ御嶽, 御山嶽, 図9~11)**



図9. シージマタヌ嶽 (Google mapより作成)

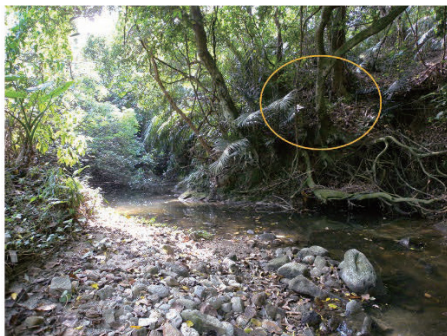


図10. 以前のシージマタヌ嶽があった所 (円内,中央の木の根っこ辺り)

以前のイビ(拝所)は,ナービグムイの上流にあった.ホソバムクイヌビワの根っ子の所がイビになっていたが,水で流されて,その痕跡もよく分からない.以前は香炉があったという.現在は農学部と北食堂の間の階段を降りた突き当たりにイビが置かれ,そこで神事が行われている.



図11. 現在のシージマタヌ嶽のイビ

シージは凌ぐこと,マタは川の合流地点のことである.昔,戦世の時代の落ち武者らが,ここに隠れて命を凌いだことが,地名の由来になっているらしい.

西原町史編集室の資料によると,旧暦の1月3日,3月15日,8月15日,12月20日には,この場所で棚原集落の神人達が神願いの行事を行っていた.現在は省略されて,年に2回,旧暦1月3日(ハチウガミ)と旧暦3月(シーミー)になっている.ここは棚原集落の発祥地ともいわれている.ここに集落の草分けである宮里一門の屋敷があったという.

『琉球国由来記』(1713)には「シギマタノ嶽」と記録され,神名は「コバヅカサノ御イベ」となっている.棚原集落で最古の御嶽と言われている.棚原集落の東側の山頂に,「タカジビーヌ嶽」という御通し御嶽がある.昔,交通が不便な頃に,この御通し御嶽で「シギマタノ嶽」の神事を行っていた.

**千原の地名 (図 12)**



図12. 千原の大地名

キャンパス内は大きくメーセンバル(前千原),ナカセンバル(中千原),クシセンバル(後千原)に分けられていた.メーセンバルは国際交流会館の裏山,以前,牛の放牧試験地に利用されていたところである.ナカセンバルは農学部棟,北食堂,

農場棟、農場内の畜産施設などの範囲にあたる。クシセンバルは工学部棟、大学寮、体育館、テニスコートなどの場所にあたる。

### 【た行】

#### チカジャングラーカー (図 21)

学会館の辺りにあった井戸である。チカジャングラーとは津嘉山小という屋号の意味であろう。この家にかかわる井戸であったと思われる。

#### チャーヤマ (茶山, 図 13)

工学部から体育館辺りが昔から茶山といわれていたところである。『球陽』の尚敬王 21 年 (1733) の条に、始めて茶園を棚原山地に開いたことが記されている。この棚原山地の茶園が、後にチャーヤマと呼ばれるようになった、と思われる。『球陽』には 20,850 余歩の面積を開いて、茶種、樹木などを植え、和漢の茶葉を製造して国用に供する、と記されている。

金武御殿からの分家といわれる普天間家一門の宗家が、250 年前に首里から茶山の番人として移ってきたという。「茶山普天間」の名で呼ばれていた。

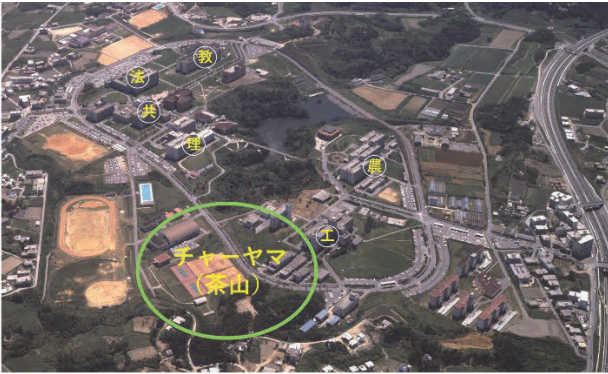


図13. チャーヤマの位置  
出典：琉大総務課大学史資料室提供写真より作成。

#### トーフクエマーチ (ターチマタマーチャー, 図 14・15)



図14. トーフクエマーチの拝所 (拝1から拝2に移動)  
出典：写真はGoogle Mapより転載。

北食堂の入り口付近にあった。2本の松で大きいのは直径 1m、高さ 10m ほどあったという。木の根元に御香炉があって拝所になっていた。棚原集落や他所からよく拝みに来ていた。その木の根元に豆腐をお供えしたら、いつの間にかそれが無くなっていったので、「豆腐を食う松」の意味のトーフクエマー

チの名がつくようになった。この松は昭和 8 年ごろまであったが、その後切られてなくなったという。

旧暦 1 月 2 日には、山番人らが集まって、この拝所で山御願 (安全祈願、無病息災) の神事をしたという。この拝所は、元の場所から琉大学生寮の北側の駐車場の角に移されている。



図15. 現在の「トーフクエマーチ」の拝所

### 【な行】

#### ナービグムイ (図 21)

千原池の上流域にある。シージマタヌ嶽の下流域にあった。直径 1m、深さ 1.6m の鍋状の水溜りになっていたという。方言名は鍋 (ナービ) 状の水溜り (グムイ) の形に由来する。言い伝えでは、津覇の古代マキョの糸蒲のノロが、戦に追われて、ここで水死したという。そのノロ墓がナービグムイの近くにあった。また昔、遊女が自殺した所と語り伝えられている。この溜め池には遊女が使っていたと思われるサバチ箱が浮いていたという。そのため幽霊が出るとの噂が流れていた。

#### ニフェマーチャー (拝所, 図 16~18)



図16. ニフェマーチャーの拝所  
出典：写真はGoogle Mapより転載。

共通教育棟 1 号館の正面玄関から北側の角地にある。地元在住者の話によると、大学移転前までは理学部よりの共通教育棟駐車場の上の丘にあったという。大学敷地の整地のため、この拝所は法文学部東側のループ道路を越えた駐車場の裏 (中城村側東口守衛室の裏側) に仮り移転された。後に同敷地

で駐車場の拡張工事が行われることになり、再度、元の拝所と思われる現在の場所に移されている。ご神体は2個の石（約15.6kg）からなっている。この拝所の移転については、祟りを恐れて誰も触ろうとしなかったため、当時、学内の交通対策委員長をされていた法文学部の垣花豊順教授が、一人で祈願をして現在の位置に移したという。その顛末について、垣花教授は1993年3月31日発行の琉大広報誌「なかゆくい」に、詳しく書き記している。

ニフェーマーチューのニフェーとは感謝、マーチューは松のことで、総じて「感謝の松」の意味である。昔、このキャンパス内には松の大木があった。周辺の人々は、この山に入って、松の枯れ葉や薪などを採っていた。山に入るとき、このニフェーマーチューの拝所で、山の神様に山を利用できることへの感謝の祈りを捧げてから、薪などを採ったという。中城村の津波、和宇慶などの人々が拝んでいたという。



図17. 以前のニフェーマーチューの拝所  
注：ブッソウゲで囲まれ、後方は大木で守られていた。



図18. 台風で破壊されたニフェーマーチューの拝所  
注：周辺の樹木は伐採され、拝所の保護機能は失われた。

【は行】

米軍訓練場

泉川寛さん（1930年生、宜野湾市在住）の話によると、米国がベトナムに軍事介入の端緒を開いた1955年以降、米軍は千原・上原・棚原地区を囲い込んで、軍事訓練場として使用していたという。当時、泉川さんの家は、宜野湾口から入って交差点（信号機）を直進した工学部寄りの所にあった。1956年初めごろのある夜、泉川さんは仕事帰りで、タクシーを途中下車

し、家に向かって歩いていると、家の前で黒人兵に“hold up”と銃を突き付けられ、身体検査をされたという。

この地が米軍の軍事訓練場に利用された理由について、泉川さんは、次のように話していた。1つは、この地の多くが西原・中城両村の公有林で占められ、土地の確保が容易だったこと、2つは中城湾に近く、山や谷や森林地などが混在し熱帯ジャングル戦に適した地形になっていたことである。

この地での訓練は1957年ごろまで行われた後、同年、金武のキャンプハンセン基地が使用開始されると、米軍はその地に移転したようである。

またこの地は第二次世界大戦中には、イギリスの日本軍陣地と連動して日本軍の前線基地となり、そのため農学部辺りには、日本軍の塹壕などが数多く掘られていたという。

戦後、千原のウフドゥデーモー（農学部周辺）あたりには、葉菜などがゴロゴロしていて、それを拾って売り、現金稼ぎをした人もいたらしい。

ボージウシューヌカー（坊主御主の井戸、図19）

農学部北側駐車場横にある。昔、茶山に隠居した第17代尚灝王（1787年7月出生～1834年7月没、在位1804～1834）が利用していた井戸だと言われている。ボージウシューとは後代の尚灝王の別称である。ボージウシューの住居は、今の北食堂の西側、工学部棟隣りにあったらしい。大学移転工事のとき、この井戸からポンプアップして水を汲み上げたが、数十分で空になったという。

琉球大学が移転するまでは、首里から礼拝者が訪れていたという。大学移転の際の整地工事で、この井戸は壊されようとしたが、そのとき首里のノロ（神職）たちが来て、残すように言われた。現在、この井戸はコンクリートの建物で囲まれ、中の井戸には移転当時のポンプがそのまま残されている。



図19. ボージウシューヌカー（中央の円で囲まれた建物）  
注：建物の中に当時の揚水ポンプが残されている。  
後方の建物は農学部棟。

ボージウシューを世話していたというイナグングウ（女性の愛称）の末裔である長濱家を訪ねた。現在の長濱家の当主第10代眞勝さん（1948年生）の話によると、長濱家第5代当主東長濱の時に、首里から千原に移住してきたという。その住居跡は琉大宜野湾口の守衛室裏側辺りにあったらしい。千原



に移ってきた年代は明らかでないが、第8代眞牛が明治42年（1909）生であることから、それから3代前になると、尚瀬王が没した1834年以前には、すでに長濱家は千原に来ていたことになる。この長濱家の先祖にノロ（神女）がいたという言い伝えがあることから、このノロが数年間、ボージウシューに仕えていたのではないと思われる。この言い伝えと関連するか分からないが、長濱家には戦前まで「千手観音」の立像か掛け軸か不明だが、仏間に置かれていたのを、正月のころ周辺部落の人々がそれを拝みにきていたという。これも戦争で焼失したために、その後祖父の眞牛が首里観音堂から複製した掛け軸を入手して飾っていたが、10代眞勝さんのときに、保管するのが困難になって、首里観音堂に返却したという。

### 【や行】

#### 屋敷跡（図20）

千原キャンパス内で確認できた屋敷跡は、全部で51箇所、その内、屋号が分かるのが45箇所であった。

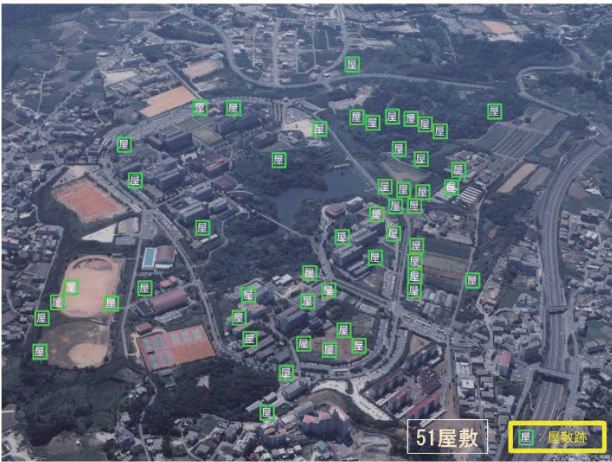


図20. 千原キャンパス内の屋敷跡

その多くは、メーセンバル、ナカセンバル、クシセンバルに集居形態で分布している。理学部、教養部、法文学部、教育学部辺りの住居は、散居形態をなしているのが特徴である。

千原は道田（ドゥダ）とも呼ばれていた。もともとは千原の集落は森川集落に属していたが、戦前期に森川から分離した。住民の多くは、廃藩置県以降に首里から寄留してきた人々（屋取、ヤードゥイ）である。

#### ヤマジグラー（図21）

農場道を南側に向かい県道34号線へ抜ける手前右側にある。昔、那覇でヤマ（糸繰り機）を買い、帰る途中、大雨に遭ったので、この場所で雨宿りしていた。すると岩が崩れ落ちてきてヤマが押しつぶされ助かった。ヤマジグラー（糸繰り機の地小）の名前は、このことに由来する。

#### ヤマバーン

棚原山には山番人が8人配置されていた。それぞれの管理区域があった。山番人には一定のクチバタ（口畑、耕作地）が与えられた。沖縄県旧慣調査資料（『沖縄県史』第21巻資料編11, 1989）には、次のようなことが書かれている。西原、中城の両間切は、数名の山番人を設け、山番人が樹木の苗を採集

して造林をする。その報償として「山番人口畑」がある。これは藩庁の認可を受けて、1名につき500坪から700坪の土地を畑地および宅地として交付したものである。

棚原山（18万坪）は8人の山番人で昭和初期まで管理されていたが、その体制は3つの組にそれぞれ分かれていた。前組は上原、宮里原、大田原の3地域に分かれ、上原を大屋良家、宮里原を呉屋小家、大田原を喜納小家が、中組は千原一帯を親泊家と喜納家が、後組は千原と道田一帯を泉川家、石原家、茶山普天間家が、それぞれ管理していた。前組の上原地域を管理していた屋良家は、250年前に首里の嘉味田殿内から分家して、上原の地に住み着いたのが始まりだと言われている。

明治以降の村有林時代には、津覇、南上原、棚原、森川、上原の住民たちは旧棚原山内に立ち入って、枯れ枝などを自由に採取できた。昭和初期には山番人制は廃止され、棚原山は個人の借地に変わっていく（表1参照）。

## 7. むすび

これまで調べた結果をまとめると、以下のようになる。

このキャンパス内は古くは琉球王国時代の山に系譜をもつ歴史上の由緒ある場所である。王国時代からの史跡等として、王府御用達の茶園であるチャーヤマ（茶山）、第17代尚瀬王が使っていたとされるボージウシューヌカー、グスク時代の14～15世紀に造られたイシグスク、按司墓などが確認できた。

千原キャンパス地域は、明治30年代の林野の官民有区分を経て、戦前期の西原村や中城村の公有林となった後も、周辺地域の住民が刻んだ山の歴史の痕跡は、以下のような形で残されている。

王国時代のヤマバーン（山番）として住みついた人々の屋敷跡、廃藩置県以降、首里などからの寄留民が作った屋敷跡などを含めると、その数は51箇所余にも及んでいる。

その他、戦前戦後にかけて、周辺住民が山及び日常生活との関わりでつくりあげた痕跡は、井戸、拝所、馬場、毛遊びの場などの形で確認できた。これら住民の生活の有り様は、とくに河川周辺で地名としても刻み込まれている。シージマタヌ嶽、トーフクエマーチュ、ニフェエマーチュの拝所は、現在でも地域住民の拝みの場所になっている。

さらに戦時中には、千原地域は北谷から南下してくる米軍を迎え撃つ日本軍の前線基地として使用され、戦後になると、ベトナム戦争が激化する前に、米軍による軍事訓練の場所にもなっていた。

地球規模の環境・自然保護問題が叫ばれて久しい。しかし足元の環境問題の認識なくして、地球規模の環境問題の解決はありえない。かつての森林を破壊してキャンパスができたこと、そしてそこに地域住民の歴史が深く刻まれていることを再認識したとき、大学における環境教育の真の意味が理解されてくるように思う。

足下の歴史や文化を復元し、語り伝えていく意味は何なの

か、生きた科学の原点が、そこに埋もれているように思えてならない。

謝 辞

本稿は2019年11月4日、琉球大学附属図書館・琉球大学博物館企画展、「いとむかしの中城～琉球大学資料にみる自然・文化・人～」の一環として行われた私の講演会（「琉大千原キャンパスの歴史と人々の暮らし」）の原稿をもとに、新たに加筆整理し直したものである。

講演会の準備及び資料等の収集の面で、下記の方々に大変お世話になった。琉球大学図書館館長・農学部教授の川本康博先生には、特に原稿のチェックから本学術報告への投稿の面でご尽力いただいた。さらに同図書館情報サービス係・保存公開関係の職員と琉球大学総務課大学史資料室の皆様にご感謝申し上げる次第である。

本稿の一部は、すでに『西原町史』（2003年）第7巻資料編6の「林業編」（山の生活誌）で公表されているが、今回は再度、資料探索と聞き取りを行い取りまとめた。聞き取り調査では、以下の方々にお世話になった。泉川寛さん（1930＝昭5年3月29日生、宜野湾市我如古2-15-2）。長濱眞勝さん（1948＝昭和23年1月20日生、宜野湾市志真志2-21-14）。津嘉山朝信さん（1947＝昭和22年2月25日生、中城村南上原818-1）。西原町棚原自治会区長の城間盛順さん。

引用文献

1. 沖縄県文化振興会. 1989. 沖縄県史第21巻資料編11. 740頁.
2. 伊波普猷他編. 1988. 琉球国由来記. 風土記社. 376頁.
3. 神谷厚昭. 1984. 琉球列島の生いたち. 新星図書版. 114頁.
4. 北中城村史編纂委員会. 2012. 北中城村史第7巻文献資料編. 北中城村役場. 214-223頁.
5. Google マップ. www.google.co.jp/maps/?hl=ja
6. 仲間勇栄. 2011. 増補改訂沖縄林野制度利用史研究. (株)メディア・エクスプレス.
7. 仲吉朝助. 1904. 杣山制度論.
8. 中城村教育委員会. 2019. 中城村戦前の集落シリーズ 15 「南上原」. 2-8頁.
9. 西原町史編纂委員会. 1987. 西原町史第3巻資料編2 西原の戦時記録. 248頁.
10. 西原町史編纂委員会. 1989. 西原町史第4巻資料編3. 西原の民俗. 西原町役場. 36～72頁. 118～166頁.
11. 西原町史編集委員会. 2003. 西原町史第7巻資料編6. 西原の産業. 西原町教育委員会. 163～231頁.
12. 西原町史編纂委員会. 1984. 西原町史第2巻資料編1 文献資料. 西原町役場. 141-142頁.
13. 琉球大学広報委員会. 1993. 3. 31. なかゆくい. 62-63頁.

表1. 中城・西原杣山の簡易歴史年表

1733 (尚敬21)	<b>棚原山地に王府直轄の茶園を開く 茶園管理人配置</b>	1885 (明治18)	「林政八書」編纂・令達 旧慣制度下の杣山の管理・利用の指針
1736 (尚敬24)	沖縄本島：杣山の竿入れ開始 (三司官蔡温主導で実行) 「杣山法式帳」(1737) 「山奉行所規模帳」(1747) 「樹木播植方法」(1747) 「山奉行所公事帳」(1751) など公布	1899 (明治32)	「沖縄県土地整理法」公布 杣山→官有地に編入
1751 (尚敬39)	全琉球の杣山・里山の位置と面積確定  ◎中城・西原両間切の杣山確定 ◎中城・西原杣山：山番人制度創設 ヤマバーン定住	1906 (明治39)	「沖縄県杣山特別処分規則」 「沖縄県国有林野整理処分規則」発布 杣山の払下げ 町村有林の創設  中城・西原杣山→村有林へ払下げ
1879 (明治12)	沖縄県設置 中城・西原杣山：首里土族寄留	1908 (明治41)	「沖縄県及び島嶼町村制」施行 中城・西原の村有林の管理： ◎ヤマバーン制継続
		昭和初期	中城・西原村有林のヤマバーン 制度廃止→居住人に分割借地

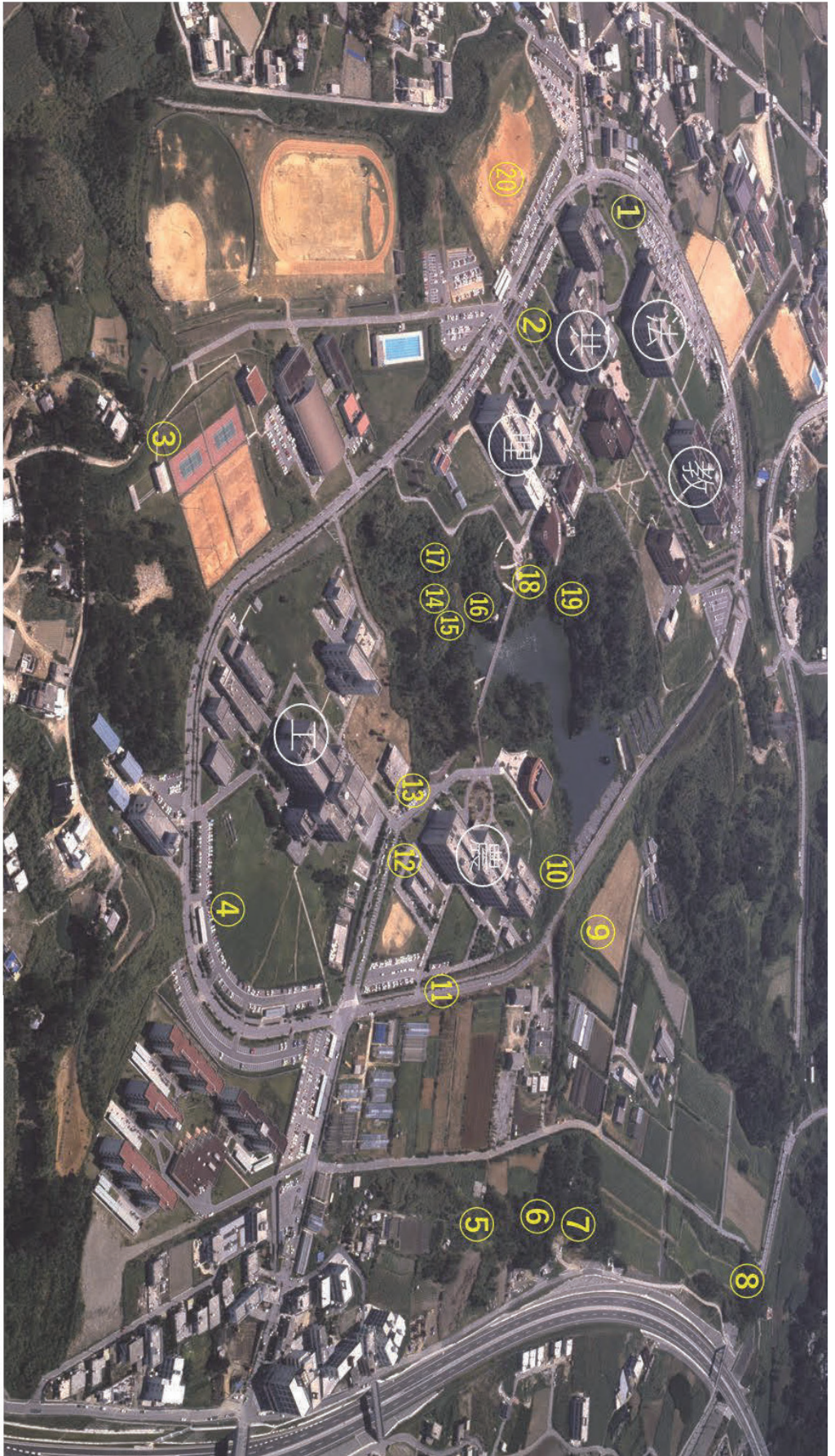


図21. 千原キャンパス内の遺跡分布

出典：琉大総務課大学史資料室提供写真より作成。

- ①井戸・屋敷跡 ②ニフエーラーチュー ③カガニガマ ④サーターヤー ⑤井戸・屋敷跡 ⑥按司墓  
 ⑦イシグスク ⑧ヤーマソーグラー ⑨・⑩サーターヤー ⑪ウマウイターグラー ⑫ホーシウシユースカー  
 ⑬トーフクエーヌーチュ ⑭シージマタヌ嶽 ⑮ナービゲムイ ⑯ウフタチグムイ ⑰シージマタヌカー  
 ⑱チカジャングラーカー ⑲ガチマタ ⑳サカタリ山